

脳卒中 [装具Ⅰ]

2-P2K-13-4 脳卒中患者4例における異なる装具間と日差のパフォーマンステストに対する影響

関西リハビリテーション病院リハビリテーション部

山口 香織, 若竹 雄治, 松本 憲二, 坂本知三郎

【はじめに】

脳卒中患者の下肢装具を適切に選択することは、歩行能力を向上させるために重要である。装具選択は、種類の異なる装具や継手を検討するが、その違いを歩行評価結果の定量的な差で示した研究は少ない。

一方、当院の脳卒中患者における装具作製時期の歩行自立度は要監視者が4割であり、高次脳機能障害を有する者は6割を占める。先行研究では、歩行の自立/非自立や高次脳機能障害の有無が歩行評価結果の変動に影響するとしており、装具や継手を歩行能力評価に基づき検討していく上で課題となりうる。今回、4日間の歩行評価結果の日差と異なる装具間の差のどちらが歩行評価結果に影響するかを確認した。

【対象と方法】

歩行に監視を要する脳卒中患者4名(年齢：63.7±9.7歳，運動麻痺：Ⅲ)を対象とした。高次脳機能障害(以下，HBD)の程度を行動から評価するCognitive-related behavioral assessmentは平均20.25±2.5点であった。“異なる装具”は、実際に理学療法士が担当症例で検討した二種類とした。歩行能力指標は、当院の定期評価である10m歩行テストとTime up and go test(以下，TUG)を選択し、4日間各評価を実施した。“異なる装具”と“評価計測日”を二要因とした反復測定による二元配置分散分析を行った。

【結果】

10m歩行テストとTUGはともに“異なる装具”間にもみ主効果があり、交互作用はなかった。

【結論】

歩行能力評価として、10m歩行テストとTUGは、“異なる装具”間の差を反映した。今後は、HBDを有する対象者でも装具を歩行能力評価から検討できるか対象者を増やして確認する。